

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4391300169		
法人名	社会福祉法人グリーンコープ		
事業所名	グループホーム ほのか・豊野		
所在地	熊本県宇城市豊野町糸石3928-1		
自己評価作成日	令和3年3月2日	評価結果市町村受理日	令和3年5月7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年3月20日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

認知症対応型共同生活介護事業所として開所し7年目を迎える。豊野地域では元々、訪問介護事業を行い、現在も継続して高齢者介護事業に従事している。地域密着型の高齢者の住環境や独居世帯などの現実的な生活ニーズに精通しており、「ご自宅での生活が一番である」という思いを基本に、ご自宅での生活環境の延長上の「生活の場」「それぞれのご利用者の尊い人生時間をお送りいただける場」をどうあるべきかを、ご入居前の状態から把握し、ケアに生かしている。地域の馴染みの関係の延長上にある共同生活の支援の場であり、顔見知りが親しく集う場でありたいと考えている。このような思いで開所し現在に至っている。在宅生活における介護支援の延長上であることを意識し、それぞれのご利用者様の生活背景を十分把握し、サービスを提供している。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

旧豊野村の通学路に面して建つホームは、以前営業していたスーパーなどはすでに閉店し建物だけが残っているが、役所や、郵便局、農協を含むガソリンスタンド、医院などが点在し、かつてはメインストリートとして栄えていたことが窺える。ホームは一人ひとりの思いを大切に支援に努めており、入浴も回数などに囚われず、先ずは本人が気持ち良く入ってもらうことを基本としている。また、法人や地域物産館など鮮度や安心・安全にこだわった食材を利用し、入居者も皮むきなどに一緒に取り組みながら日々の調理が行われている。好みの飲み物でティータイムの時間を持つ際は、自己決定ができるようメニュー表を作成するなど、職員のアイデアが更に楽しいひと時に繋がっている。今年度はコロナ感染症への対応から、外出や家族、友人などの面会の機会は控えているが、これまでは玄関に限らず、ウッドデッキ側から気軽な訪問も行われている。管理者は感染症の早い終息と、引き続き気軽に足を運んでもらえるホーム運営を継続していきたいと語っており、今後の取組に期待したい。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内に掲示しており、職員一人一人に書面でも配布している。いつでも確認でき、振り返りができる環境をつくり、日々の介護につなげていくことを課題としている。	開所から7年目となるホームでは、当初からの理念に入居者一人ひとりのこれまでの暮らしぶりからその人らしい生活を支え、なごみの場となるようなホーム運営を展開するとした内容を盛り込んでいる。旧豊野村であった当地域からの入居者が多く、馴染みの風景が日々の生活を豊かにしており、ここで又新たな関係ができるようにとの思いで職員はケアにあっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	これまで、定期的(2か月に一回)に地域に向けたサロンを開催し、地域との交流の場としていたが、今年度はコロナの影響で開催できなかった。月に一回の清掃活動は継続している。	コロナ感染症の拡大に伴い、地域交流室を開放して開催していたサロンも今年度は中止されている。ホームは地域の一員として回覧板を活用した情報発信や、毎月の清掃活動で前面道路のゴミ拾いに参加し、地域代表者(区長)の依頼に敷地内に“ポイ捨て禁止”の看板設置に協力している。	例年であれば地元小学校の職場体験などの受け入れにも尽力しており、コロナ終息後の地域交流が待たれる。立地を生かし下校時の小学生への声掛けなど、入居者が出来る事で新たな交流に繋がる事が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サロンは開催できなかったが、運営推進会議にて、日々の支援状況を、地域の方に向けて報告する場を設けている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	書面での開催もあったが、2ヶ月に1回開催し、事業所の活動報告や入居者の状況報告をしている。行政や地域の方からの質問や助言を受けサービス向上に活かしている。	今年度は6、10、3月の3回を通常開催として、家族を除くメンバーが参加して行われている。他3回はコロナの状況を見て書面審議とし、資料をメンバーに送付している。ホームからの一方的な情報発信に終わらず、質問や意見が会議ごとに多数あがっており、参加する包括職員からも、地域のパイプ役として会議運営を評価されている。	会議内容は議事録にわかりやすく詳細にまとめられており、文章から地域への浸透度も窺える。今後も会議がホーム運営に反映されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月地域包括支援センターに向けて、施設の入居状況等を報告し、密な連携をとっている。2ヶ月に1回のグループホーム連絡会を開催し、地域の他グループホームとの協力関係を築いている。(本年度は一回のみの開催)	運営推進会議には毎回包括支援センター職員が参加しており、情報を共有してホーム運営に適切な意見や提案を得ている。管理者は書類提出に定期的に包括に出向き、良好な関係を築いている。グループホーム連絡協議会の研修会も中止となっていたが、現在はズームでのやり取りが行われており、同業者との協力体制を継続している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「緊急性」「一時性」「非代替性」という3つの条件を理解し、身体拘束はしてはいけないという基本スタンスでケアを提供している。運営推進会議と併せて、身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会を開催している。	身体拘束及び虐待防止の委員会を毎月 of 定例会議の中で開催して、職員の意識強化を図っている。また、運営推進会議で身体拘束適正化委員会を設置し、人感センサーの使用について、三原則に則り使用目的や有効性、必要性、継続の有無などについて参加者に説明し、理解を得ながらホームの透明性を図っている。	定例会議の中で気になる点など具体例を出しながら検討しており、言葉使いについては特に声の強弱や語尾の上げ下げ、表現方法に注意しなければならないとしている。取組に期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月1回の職場会議で虐待防止委員会を開催し、意見交換を行っている。意見箱を設置し各職員からの情報も収集している。各職員から年に1回アンケートを取り、意識付けとともに、虐待防止に取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内や外部の研修へ参加する機会を設けている。入居者に後見人制度を利用されている方もおられるので、より認識しやすい状況にあった。今後も引き続き関係機関と連携していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者や家族へは感染症対策を徹底したうえで、事前の施設見学をしていただき、書面で契約書と重要事項を説明しサービス内容や費用等について十分な説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見、要望は直接又は電話にて、個別に聞かせて頂いている。今年度は面会制限の期間が長く、書面や電話が主だった。運営推進会議では家族代表の方からも聞かせて頂いており運営に反映させている。意見箱も設置しており匿名での意見、要望も頂けるようにしている。集約し家族会と運営推進会議に報告している。	今年度はコロナにより家族の面会を制限せざるを得ない時期もあったが、現在は感染症対策をしたうえで、地域交流室での短時間面会を行っている。家族会も中止となり、職員はほのか便りで入居者の日常を伝えながら、電話などで家族の意見を聞き取るようにしている。入居者の中には「季節の物を食べたい」など、彼岸を前にぼた餅を希望される方もおられるようである。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職場会議において運営状況の報告をし、職員の意見や提案などを聞く機会がある。職員ひとりひとりが運営にかかわることを意識し、責任を持った運営を心掛けている。必要に応じては個別で面談を行っている。	月の定例会議でホームの現状を共有し、身体拘束などの勉強会を実施している。1日2回の申し送り(朝・夕礼)を通じて、入居者の様子や職員の気づきを出し合うようにしているが、つつい検討会になってしまうことから時間の見直しを行い、端的かつ的確に話し合うなど職員の意識も変化している。職員研修の企画やベースアップなど、個別対応に応じている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務状況、意欲、スキル等総合的に把握し、労働環境や報酬を改善しやりがいを持って仕事ができるよう努めている。特に職員の意見は必ず取り扱う場を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員へ法人内や外部の研修案内を行っている。研修が必要な職員へは、受ける事ができるよう勤務に組みこんでいる。今年度は、オンライン研修への対応も出来ている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会宇城ブロックに加入してネットワークづくりやお互いの事業所との交流はできている。勉強会へは職員も参加できるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期のインテークの段階で幾度もコミュニケーションをとることから始め、早期になじみの関係構築が可能なように生活歴、趣味、家族関係など多様な方向性からアプローチを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記同様に家族のレスパイトケアにも重点を置き、出来るだけ正確なニーズの把握に努め、まずは信頼関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	「その時」にグループホーム入所の必要のある方に入所して頂き、生活していくうえで必要になった時点でその都度サービスの再検討を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共同生活介護事業であることを念頭に入れ、本人の訴えに耳を傾け、気持ちよく毎日を過ごしていただいている。できることはしていただき、自分の役割を持ち、共に生活する者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	パーソンセンタードケアの考えを基本に支援している。本人と家族の関係を良い状態で保ち面会に来やすい環境をつくり介護に家族も参加しているという意識を持っていただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人が今まで築いてきたネットワークを大切に、昔からの馴染みの方の面会や、外出時にも思い出の場所へのお誘い等配慮を行っている。今年度は外出機会は極端に減ってしまった。	コロナ禍以前には自宅への帰省や公園、物産館、小学校など地域資源を活用し、入居者に馴染みの場所に出かけたり、「近くに来たから」と、親戚や近所の方が訪れるなど地域ならではの関係性が見られている。お茶の時間を楽しんでもらおうと、入居者の自己決定を尊重し、それぞれに好みの飲み物を選択してもらおうメニュー表を作成するなど、馴染みの味に寄り添ったケアが行われている。	入居者の「サイダーはコップで飲みたい！」など、もっともと言える意見にマグカップからコップに替えるなど、職員は適切な器を選択している。継続した取組が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が同じ空間で共同生活をされているので、より良い関わりができるよう席の配置を考慮したり、ときには利用者同士の間を職員が繋ぐなどの配慮を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時における正確な情報提供や、関係性の継続は、非常に重要と考えており、必要に応じた対応を心掛けている。医療機関への入院となった方には必要な情報をこまめに伝えた。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや意向は、言葉や表情にて確認するよう努めている。本人の意向を家族へ伝え、できる範囲で実現に向かうよう努力している。	入居者は自由に自らの希望を口にされており、食べたいものや行きたいところを普段の会話時に職員に伝えられている。職員は入居者のこれまでの生活歴から、したいことや食べたいものがホームでも引き続き出来るよう工夫しており、男性入居者の将棋の相手や、好みの食べ物への配慮など個々の思いを大切にしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	インタビューを繰り返し、出来るだけ正確なアセスメントが出来る様に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	最低限の基本的な生活リズムを守りつつも、それぞれが楽しんで、自身の力を維持出来る様な時間の過ごし方を日々提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期カンファレンス、緊急カンファレンス等を必要に応じて開催し、本人、家族、時に主治医の意見も取り入れ計画に反映させている。スタッフひとりひとりが参加できる仕組みを構築する。	ケアカンファレンスで職員は気付きを出し合い、入居者の現状に必要な支援を提案している。ホームでは入居前からの暮らし方が引き続き発揮出来るよう本人や家族の意向を聞き取り出来る事で対応している。台所での野菜の下ごしらえに笑顔で応じ、漬物の差し入れを喜ばれるなど、家庭生活の延長となるようなプランを立案している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化や、状態の観察が必要な場合、医療機関受診なども含め、個別記録への記載と別に申し送りノート、受診記録などを活用し情報の共有に務めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	多様化する様々な利用者のニーズに対応できるよう、常日頃より心がけている。実現可能かは別にして、一旦話し合い、臨機応変に対応できるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	昔ながらのなじみの関係を継続させ、地域ボランティアの協力等地域資源の活用と協力を得られるように努力している。担当だった民政委員より、意見や助言等頂けた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の健康管理は特に重要なファクターであると認識し、その上で、本人と家族の了解と納得の上で適時、医療機関の受診している。常時看護職員を配置し、異常の早期発見に努めている。	ホームは看護職員を中心にバイタルチェックによる健康管理をはじめ、主治医との連携を図りながら、入居者の日常を支えている。かかりつけ医は本人・家族の希望を尊重し、現在、協力医やこれまでの医療機関による訪問診療を支援している。専門医についても希望に応じた医療機関へ職員と受診に出向いている。職員は日頃の関わりや食事摂取、排泄などから異常の早期発見に努めており、気になることは早めの医師への相談や指示を受けている。ホーム運営に理解のある協力医療機関が、近隣にあることも心強いものとなっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業者内の看護師には利用者の健康状態の把握が出来る様に、また、スタッフ全員が情報を共有出来る様に記録、申し送りノートを活用し、適時的確な医療機関の受診と早期対応ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の地域連携室との情報交換や、入院時の状態把握の為に定期訪問を行っている。入院～治療～退院時の本人のリロケーションダメージを最小限に考え、退院後のADL早期回復にも配慮し対応を心掛けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアに関する指針を契約時に説明している。終末期になった時点で再度説明を行い、本人と家族の思いも十分に受け止め主治医と共に方針を共有し支援している。グリーンケアについても配慮している。今年度も1件看取りを行った。	入居時に指針をもとにホームの取組を説明し、リスク説明書と併せて同意を得ている。また、そのような状態になった時点で、新たに話し合いの機会をもち意向を確認している。昨年10月に医師との連携を図りながらお一人の看取りを支援している。感染症への対応に配慮しながら、亡くなる前、当日も家族との時間が持たれ、安らかな最終を迎えられている。終末期支援に関する研修会は年間計画に含まれており、ホームの出来る事などについても、共有を図っている。	支援後改まった振り返りの機会は持たれていないが、本人を偲びながら日頃の関わりの重要性などについて、共有する時間を持たれることも必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定例の研修にて、緊急時の対応・心肺蘇生法・AEDの使用方法等を取扱い、自分のものとしてできるよう努めている。正確に慌てず出来る様に対応を共有しイメージトレーニングを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、火災を想定した避難訓練を消防署の協力で行い、職員が利用者を迅速安全な避難誘導と身の安全確保が出来るよう実施している。また、非常災害時の対応マニュアル等策定している。	今年度消防署の協力を得、火災を想定した訓練を2回実施している。非常災害時の対応マニュアルを策定しているが、自然災害については、ハザードマップの確認のみを行っている。災害備蓄では、食材を多めに確保するようにしている。昨年の台風10号接近では、窓を全て段ボールで塞ぐ対応を取っている。また、地域の方々の避難受け入れも想定している。	今後も火災に加え、発生したこれまでの自然災害について風化させない取組に期待したい。備蓄についてはリストを作成し管理しておくことが必要と思われる。また、日々実施している安全チェックについては、職員の意見なども聞きながら、見直しを行われることを期待したい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけが粗雑にならぬように、それぞれの利用者の立場に立った声掛けが出来るよう尊厳とプライバシーに配慮している。職員同士でも気づいた時は直接言い合えるように、互いに気を付けている。	呼称は基本的に苗字としているが、本人や家族の希望により下の名前でも対応している。中には旧姓が反応の良い方もおられるようである。身だしなみやおしゃれの支援では、必要に応じて衣類の選択をサポートしたり、家族の協力を得ながらこだわりの化粧水を継続して使用できるようにしている。感染症からこれまで2ヶ月に一度のカット支援が3か月ごととなっており、通常交流室でのカットが夏場は開放的なウッドデッキで行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は利用者の声にならない気持ちをくみとり、さまざまなアプローチを行っている。決して支援者本位にならず、希望の表出や自己決定が出来るよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフの都合ではなく、利用者本位のケアを最優先に考え、1人ひとり生活のペースが違うのは当たり前であり、可能な限り寄り添って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その季節に合った服装や身だしなみを援助している。整髪も定期的を実施し、希望の店がある場合利用できるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者に希望の献立を聞いたり作り方の助言を頂いたりしている。それぞれのADLに即した生活活動の中で食事の下準備等、一緒に楽しんで出来ることは、なるべく参加していただけるように配慮している。	献立はメインを決めて、副菜は冷蔵庫内の食材を活用している。入居者の好まれる肉や麺料理をバランスよく取り入れたり、誕生会には、普段より豪華に午後にはケーキで祝うなど、楽しみのある食事の提供を心がけている。また、入居者から「季節の物が食べたい！」「ぼた餅が食べたい！」「漬物がないと食が進まない！」など出される要望を可能な限り取り入れている。鮮度や安心・安全にこだわり、法人から配達される食材や、野菜は地域物産館から購入している。職員は持参した弁当を食べており、夜勤者1名が同じもの食べ、代弁者として感想などを調理担当者に伝えている。	入居者の中には野菜の皮むきなどに腕を振るわれている。里芋の皮むきで「何に使いましょうか～！」の職員の質問に「のっぺ！」と、郷土料理を返答されている。日常の穏やかな光景が継続されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者に準じた食事形態や量を考え、介助も過介助にならないように気を付けて行っている。摂取量が少ない時は介助を行ったり、栄養補助食品を摂取して頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に利用者のそれぞれ違った口腔内環境に見合った口腔ケアを行い、健康的な口腔内環境の維持に努めている。必要に応じて、訪問歯科で治療や、口腔ケアに関して職員へ指導も依頼し、清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限り、排泄に対する身体機能維持に務め、尿意、便意の確認と排泄パターンを把握し、出来るだけトイレでの排泄を試みている。	日中はトイレでの排泄を基本とし、必要に応じてパットを併用しながら、布パンツやリハビリパンツ、おむつの使用を個々に応じて支援している。現在ポータブルトイレを使用される方はおられない。夜間も誘導やオムツの他、自立でトイレに行かれる方もあり、転倒の無いよう見守りに努めている。また、夜間でもトイレの利用を要望される場合は、本人の気持ちを大切に対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品や腸内細菌活性飲料の活用等を常日頃から行い、出来るだけ自然排便が出る様に日々努力している。自己排便が困難な方へは主治医へ相談し薬の処方を受け2日に1回は排便できるように支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人が気持ち良く入浴をするという事を基本とし、毎回のお湯の入れ替えを行い、完全に個別での入浴としている。入浴時間帯は本人の希望を伺い、入浴中はリラックスできるよう配慮している。	気持ちの良い入浴支援を職員間で共有し、午前を中心に週2回、また、失禁時など必要に応じて対応している。毎回湯を入れ替え一番風呂気分を味わってもらい、リフト浴の設置もあり、全員がゆっくり湯舟に浸ることが出来ている。入居者の中には入浴を楽しみにされている方も多く、浴槽で鼻歌を歌われたり、音楽を流すと手拍子をされるなど、気持ちの良い入浴であることが窺える。季節湯に使用する菖蒲や柚子は、差し入れなども活用しながら全員が楽しめるよう、2～3日実施している。	入浴拒否のある方には時間をずらしたり翌日に変更や、予備日の日曜に支援するなど無理強いせず、ゆっくり楽しんでもらえるよう取り組んでいる。鼻歌や手拍子など入浴中の様子も、引き続き家族へ伝えながら安心に繋げていただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本的な生活リズムは守りつつも、それぞれの体調や気分に合わせてという事を重視し安眠や休息が出来るよう個別の対応を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理もスタッフ全員が把握し、薬説明書も最新のものが介護現場で確認出来る様になっている。月1回の職場会議で看護師から服薬についての説明を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で、それぞれの方が楽しんで時間を過ごしていただけるよう、得意な事・好きな事等伺いながら支援している。コーヒーや少しのアルコールなど嗜好品の把握をして気分転換を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近隣を散歩し季節感を味わうことが出来る。人が多いところへはいけませんが、今後としては家族や近隣の方への協力も含め、外出の機会を作っていきたい。	今年度はこれまでのような外出支援が出来ない分、夏まつりや、ミニミニ運動会、敬老会をはじめ、ホーム内で楽しむイベントを企画している。外泊や帰省などは行われていないが、対策を施し葬儀に出られた方もおられる。管理者はデッキや玄関先での日光浴の継続と併せ、感染症の状況を見ながら外出の機会を作っていきたいとしている。	道路に面し蒔いたひまわりの種は、見事に開花し道行く人の目に止まったようである。敷地内は安全に散歩ができる環境であり、今後も季節の草花を見ながら、身近な外出の機会を継続していきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には金銭管理は事業所で行っているが、本人のADLに合わせ少額をお持ちの方もいる。その方へは買い物の同行を行い好きなものを選び支払うという支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの依頼がある時はいつでも電話をかける支援を行っている。手紙が届いた時は本人へ渡し必要な方へは読む支援を行っている。何か知らせたいと言われた時は代わりに伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は大切なプライベート空間、その他の共有スペースも重要な生活空間であると認識し、換気や温度湿度調節を行い居心地の良い環境づくりをしている。毎月、ホールの壁に季節を感じられるように装飾したり、季節の花を飾るようにしている。	通学路に面して建つホームは、駐車スペースも広く、家族をはじめ地域の方々など気軽に訪問できるようオープンな環境作りに努めている。コロナ禍以前は入居者の親類や知人などが、「おじゃましま〜す！」と、玄関に限らずウッドデッキ側からも気軽に訪問されていたようである。リビング食堂は入居者が日中の殆どを過ごす空間であり、季節に応じた飾りつけなどを施す他、1日2回の手すりなどの拭き取りをはじめ、これまで以上に掃除や換気に努めている。	管理者は物的な環境に限らず、入居者の生活が「ほのかな毎日、ひまわりな毎日」となるよう努めたいとしている。取組に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広い共用スペース内においても、個々の思いやその時々のお気持ちに合わせてご本人の思いにあった座席の配置等、考慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内での環境として自分の使い慣れた家具や装飾品の持ち込みを積極的に進めており、テレビなど電化製品も置き、ご本人が少しでも落ち着ける空間作りに努めている。	ホームではクロゼットを用意しており、カーテンやベッドなど必要な品の持ち込みを依頼している。また、参考になるよう他の入居者の部屋を許可の元案内している。他の介護施設より入居される際、全ての品を持ち込まれた方や、昨今は収納用として家具より、プラスチックケースも多くなっているようである。感染症への対応から現在は、衣類のチェックや衣替えなど、職員が中心に行っており、不足の品などがあれば、その都度依頼している。	面会が出来ない家族にとって、安心に繋がるよう、引き続き居室の様子についても小まめに連絡を行われることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活機能レベルの維持と改善を重要視した対応は、日常生活を送るうえで非常に重要と考え、手すりや椅子などを適した場所で利用する事により本人が安全安楽に自立動作を行えるような環境づくりを行っている。		